

一生勉強 一生青春

教育長 竹居 秀子

この言葉は、書家で詩人の相田みつを氏の言葉です。私はこの言葉が大好きで手元に置いて眺めています。

私は、令和3年4月定年退職と同時に大学院に入学し、花の大学生になりました。90歳過ぎの両親が今更何をしに大学に行くのかと繰り返し問うてきましたので、そのたびに学びの更新の大切さを説いておりました。大学院の同級生は、学びを深めようと主体性を持って集まってきた教育委員会事務局職員、校長や事務職員など、ほとんどが現役の方々でした。私は同級生や教授陣と共に、平日夜間や週末等に自身の研究を深めるため、熱く議論を交わしました。その時間もとより、同級生との交流は、正しく青春そのものでした。

「勉強」という言葉は、ともするとテストや受験勉強を連想させ、良いイメージを持たれない方がいる一方で、「青春」という言葉は、人生の春に例えられ、生涯で最も輝かしい時を連想する方が多いのではないのでしょうか。この一見すると相反するこの2つの言葉を、相田氏は「ワクワク感」でつなげたのではないかと推測します。

人に強制されて行う勉強より、自らの問いの答えを、知的好奇心を満たしながら探っていく勉強の方が楽しいに決まっています。

今、学びのあり方が、教える側主体の学びから学ぶ側主体の学びへと大きく転換しようとしています。自分や世の中の「なぜ？」に向き合い、自ら答えを探し出す学びへの転換です。

今後、生成 AI を含むデジタル技術の進展は、学びに好機をもたらすと同時にリスクをもたらし、未来は一層予測困難なものになっていくかもしれません。子ども達には、どのような未来になったとしても、学びが生きる原動力になり、他の生命や幸せを守ることにつながることを確実に伝えていかなければなりません。そのためには、教育委員会を含め、学校に携わる全ての大人達が学び合い教え合い支え合う姿や、課題解決のために学びに真剣に向かう姿をロールモデルとして示すことが肝要と考えます。

今後、学校が子どもの学びの場であるだけでなく大人の学びの場ともなり、「一生勉強 一生青春」が子どもと大人の合言葉になることを心から願ってやみません。

[2023.6.28 掲載]